

10で除して求めたMOEは9,600となった。なお、環境に由来する食物からのばく露量は少ないと推定されており、そのばく露量を加えてもMOEが大きく変化することはないと考えられる。従って、本物質の経口ばく露による健康リスクについては、現時点では作業は必要ないと考えられる。

吸入ばく露については、一般環境大気中の濃度についてみると、予測最大ばく露濃度は1.3 µg/m³未満程度であり、無毒性量等3.2 mg/m³と予測最大ばく露濃度から求めたMOEは2,500となった。また、局所地域のデータとして報告のあった一般環境大気中の濃度を用いて参考として算出すると、予測最大値は3.8 µg/m³程度で、MOEは840となる。従って、本物質の一般環境大気の吸入ばく露による健康リスクについては、現時点では作業は必要ないと考えられる。

有害性の知見				ばく露評価		リスク評価の結果			判定
ばく露経路	リスク評価の指標	動物	影響評価指標(エンドポイント)	ばく露の媒体	予測最大ばく露量及び濃度				
経口	無毒性量等 2.5 mg/kg/day	ウサギ	吸収胚発生率の増加	飲料水	— µg/kg/day	MOE	—	×	○
				地下水	0.026 µg/kg/day	MOE	9,600	○	
吸入	無毒性量等 3.2 mg/m ³	ヒト	運動神経伝達速度の低下など	一般環境大気	1.3 µg/m ³	MOE	2,500	○	○
				室内空気	— µg/m ³	MOE	—	×	

4. 生態リスクの初期評価

急性毒性値は、藻類では緑藻類 *Chlorella pyrenoidosa* の生長阻害における96時間EC₅₀ 10,600 µg/L、甲殻類ではオオミジンコ *Daphnia magna* の48時間LC₅₀ 2,100 µg/L、魚類ではグッピー *Poecilia reticulata* の96時間LC₅₀ 4,000 µg/Lが信頼できる知見として得られたためアセスメント係数100を適用し、急性毒性値に基づく予測無影響濃度(PNEC) 21 µg/Lが得られた。慢性毒性値は信頼できる知見が得られなかったため、本物質のPNECは、甲殻類の急性毒性値から得られた21 µg/Lを採用した。

PEC/PNEC比は淡水域では0.05、海水域では0.06となるため、現時点では作業は必要ないと考えられる。

有害性評価 (PNECの根拠)			アセスメント係数	予測無影響濃度 PNEC (µg/L)	ばく露評価		PEC/ PNEC比	評価 結果
生物種	急性・慢性の別	エンドポイント			水域	予測環境中濃度 PEC (µg/L)		
甲殻類	急性	LC ₅₀ 死亡	100	21	淡水	1.1	0.05	○
					海水	1.2	0.06	

5. 結論

結論			判定
健康リスク	経口ばく露	現時点では作業は必要ないと考えられる。	○
	吸入ばく露	一般環境大気では現時点では作業は必要ないと考えられる。	○
生態リスク	現時点では作業は必要ないと考えられる。		○

[リスクの判定] ○：現時点では作業は必要ない、▲：情報収集に努める必要、■：詳細な評価を行う候補、×：現時点ではリスクの判定はできない